

英語辞典の略語に関する一考察

——MED は Middle English Dictionary か Macmillan English Dictionary か——

平 井 秀 和
鈴 木 聡

1 はじめに

近頃、いろいろなところでMEDという略語を聞くようになった。この言葉を聞いた当初、筆者達は「MEDは随分早く改訂版を出し、内容も随分現代英語の語法に触れるようになったのだな。しかも、いつの間にか増補版まで出していたのか」と強い衝撃をうけた。というのも、筆者達の考えるMEDとはThe University of Michigan Pressより1952年から出版され2001年に完成したMiddle English Dictionaryのことを想定していたからである。

ご存知のようにMiddle English DictionaryはOEDの編者の一人クレイギーがOEDの完成後これから編纂すべき学術辞書の一つとしてMiddle English(以下ME)の辞書を挙げたことにより、その編纂をアメリカ現代語協会(The Modern Language Association of America)が引き受けることになり、1925年から1930年にかけてはコーネル大学が、1930年から現在まではミシガン大学が中心となって行っているものである。

しかし、筆者達がこのMEDに関する話を聞いていて、どうも妙だと思ったのは現代英語の語法については話が出るものの、なぜかMEについての話は一切出てこない。よくよくきいてみると、このMEDというのは2002年Macmillan社から出版されたMacmillan English Dictionaryであることがわかった。なるほど、それならばMEではなく現代英語の語法の話が出てく

るのも納得できると思ったが、同時にふと疑問もわいてきた。というのも、筆者達は共に英語学一中でも「英語辞書学」一を専門にしているが、基本的なアプローチは、平井は“English Linguistics”，鈴木は“English Philology”と細かい分野では異なるものの、共にMEDはMiddle English Dictionaryの略語であると思ってきた。しかし、よく耳にするMEDはどれもMacmillan English Dictionaryをさしていること、更に開隆堂のSunshine English Course IのTeacher’s Manual 指導書（解説編）の引用文略語一覧ではMacmillan English Dictionaryの略語はMEDと掲載されていた。そこで、鈴木が大修館書店の『英語教育』のQuestion Box 欄に以下のような質問を投稿した。

「最近、ある場所でMEDと言う略語を良く聞くので、話を聞いていたところ、どうやらMacmillan English Dictionaryのことだと判明しました。私自身は、MEDというについ、Middle English Dictionaryの略語だと考えてしまうのですが、最近ではMacmillan English Dictionaryの略語をMEDというのでしょうか。もし、そうだとすると、論文中で表記する場合、Macmillan English DictionaryとMiddle English Dictionaryを表記する場合は2つとも正式名称で書かなくてはならないのでしょうか。私自身はMacmillan English Dictionaryの略語としては、辞書の歴史的な立場としても、Mac.Dとすべきだと思うのですが、如何でしょうか。ちなみに、開隆堂のSunshine English Course IのTeacher’s Manual 指導書（解説編）の引用文献略語一覧ではMacmillan English Dictionaryの引用文献略語一覧ではMacmillan English Dictionaryの略語としてMEDと掲載されています。」

2 『英語教育』の答え

これに対し、『英語教育』2005年9月号のQuestion Box (P74～75)に八木克正氏による以下のような答えが掲載されていた。

「辞書の略語は、それぞれの辞書がみずから決めているもの（例えば、Longman Dictionary of Contemporary English は、Forward で LDOCE としています。また、The Concise Oxford Dictionary も Forward で COD としています。）もあり、巻頭の解説でも終始 Macmillan English Dictionary のように、書名をフルに使っているものもあります。OED,SOD,COD,POD のように伝統のある辞書の略語が歴史的に確立したと考えられる場合は別にして、それぞれの辞書をどのような略語で示すかは、それぞれの論文や著者、辞書などの著者が決めることになんら問題はないと思っています。従って、Macmillan English Dictionary を MED と略すことに何ら、問題はないと思っています。私も MED と言う略語を使っています。（QB30の解答欄をご覧ください。）『英語慣用法辞典』（第2版、三省堂、大塚高信・小西友七編）の改訂版として『現代英語語法辞典』（仮称）を準備中ですが、ここでも MED と略しています。

樋口昌幸著、マイケル・ゴーマン協力『例解現代英語冠詞辞典』（大修館書店、2003）の参考文献（P479）は次のように述べています。「Macmillan English Dictionary (McED) [本書では McED と略す：MED は本来 Middle English Dictionary の省略形]」。質問者もこの辞典の著者と同じような考え方をとっておられるものと思います。ただ、Macmillan English Dictionary（上記表記）は、自らの社名は Macmillan と綴っています。仮に、Macmillan English Dictionary と Middle English Dictionary の両方を一つの論文などで引用あるいは言及する場合、質問者のように略語を区別する工夫が必要でしょう。」（下線部は筆者達によるものである）

3 八木克正氏の答えに対する疑問

筆者達は、上記の答えを読んだ時に「仮に、Macmillan English Dictionary と Middle English Dictionary の両方を一つの論文などで引用あるいは言及する場合、質問者のように略語を区別する工夫が必要でしょう。」という答

えに対しては「やはり」と納得した部分と同時に、納得できない部分が残った。筆者達が納得できなかった部分は「辞書の略語は、それぞれの辞書がみずから決めているもの」「巻頭の解説でも終始 Macmillan English Dictionary のように、書名をフルに使っている」「OED, SOD, COD, POD のように伝統のある辞書の略語が歴史的に確立したと考えられる場合は別にして、それぞれの辞書をどのような略語で示すかは、それぞれの論文や著者、辞書などの著者が決めることになんら問題はないと思っています。」の箇所である。

4 Middle English Dictionary の略語を MED とするのは個人的な問題か

筆者達もそうだが、八木氏が挙げた『例解現代英語冠詞事典』（大修館書店、2003）の著者である樋口昌幸氏も単に自分達が論文に執筆する際の略語として Middle English Dictionary の略語を MED の略語としているのではない。実は、MED という略語は Macmillan English Dictionary が出版される以前から Middle English Dictionary の略語としては半世紀以上にわたって定着している略語だからである。

事実、以下の書籍において Middle English Dictionary の略語として MED が認められている。

(1) 「主要参考書目 I 辞典

i) 英語関係

Kurath Hans and Sherman M. Kuhn: Middle English Dictionary.

Michigan U.P. 1952-(in progress)(abr.M.E.D.)」

(中島文雄、寺沢芳雄共編『英語語源小辞典』研究社、1970, xv)

- (2) 「学術的に充分信頼できる ME 辞典は、現在刊行中の次のものである。

Hans Kurath and Sherman M.Kuhn, Middle English Dictionary. Ann Arbor, Michigan: University of Michigan Press, 1952-.21.5×28 cm. 略称 MED」
(永嶋大典著『英米の辞書－歴史と現状』研究社、1974、P168)

- (3) 「本書でとりあげた主な英英辞典リスト一覧

Kurath Hans and Sherman M.Kuhn, Middle English Dictionary, Univ. of Michigan Press, 1952-.[MED]」

(忍足欣四郎著『英和辞典うらおもて』岩波新書、iv、1982)

- (4) 「主要英語辞典解説 8 古期英語・中期英語

Kurath Hans and Sherman M.Kuhn&John Reidy, 1952-Middle English Dictionary, [MED] Univ. of Michigan Pr. 」

(大塚高信・中島文雄監修『新英語学辞典』研究社、P1325、1982)

- (5) 「[MED] H.Kurath and S. M.Kuhn, Middle English Dictionary. University of Michigan Press, 1952-. 現在米国で編纂途中の ME の包括的な学術辞典(現在 P の部の第三分冊まで刊行)。完成の暁にはもっとも大規模な ME 辞典となるが、印刷費などの諸経費の問題からタイプ打ちオフセット版なのでやや見づらい。語義は歴史的原理によらず、「論理的」(logical) に配列されている。」

(今里智晃・土屋典生共著 スタンダード英語講座『英語の辞書と語源』大修館書店、1984、P228)

- (6) 「15. アン・アーバー: Middle English Dictionary. (MED) William Craigie 卿(上記参照)により提案された時代別辞書の一つで、1100-1475年の期間つまりノルマン征服から印刷技術開始までを対象として

いる。MEDの事業は、1925年にコーネル大学で始められたが、1930年、この計画はミシガン大学に移された。基礎とする資料は、(a)もとはOEDのために集められた中期英語の用例カードと、(b)100人以上の学者が収集した何十万もの用例とである。1934年までには、86,000ページに及ぶ中期英語のテキストが読まれ、あるものは再読され、455,000の用例がカードに転写された。1952-1980の間にA-Nの項とOの初めの部分を含む55分冊(7219ページ、完成時に予定される辞書のほぼ70%)が刊行された。」

(R.R.K. ハートマン編著 木原研三・加藤知己共編訳『辞書学—その原理と実際 (“Lexicography: Principles and Practices” 三省堂、1984、P162)』

- (7) 「Hans Kurath and Sherman M.Kuhn, Middle English Dictionary. Ann Arbor, Michigan: University of Michigan Press, 1952-. 21.5×28 cm. 略称 MED

OED 完成後、その編者の一人クレイギーは、これから編纂すべき学術辞書の一つとしてMEの辞書を挙げたが、そのME辞典編纂をアメリカの現代語協会(The Modern Language Association of America)が引き受けることになり、1925~30年にかけて、ノーサップ(C.S. Northup)が中心となり、コーネル大学を本部として準備が進められた。ついで1930年にムア(Samuel Moore)が編者となるにおよび、本部をミシガン大学へ移し、クレイギーの仲介で、OED 編纂のために集められた資料のうち、未利用のものも含めて、ME 関係の部分をもミシガン大学へ移し、それを中核として更に新しい資料収集が行われた。しかし、ムアは1934年に56歳で急逝し、あとをついだノット(T.A.Knott)の時代(1935-45)は、大不況や第2次世界大戦などで受難期に当たり、編集計画も大幅に縮小された。戦後1946年にキュラス(Hans Kurath)が編者となったが、その頃は、外的事情も好転

しつづつあったので、一旦縮小されていた計画をムア時代のものへ戻し、全8,000ページの予定で1952年に出版が開始された。最初はオックスフォード大学出版局から出版するはずであったが、印刷費の高騰、需要見込みの減少などから、タイプ打ちのオフセット版としてミシガン大学出版局より発行されている。1983年にはPの部の第6分冊まで刊行されているが、Gの第1分冊からキューン（Sherman M.Kuhn）が編集主任、レイディ（John Reidy）が副主任となっている。完成は1990年頃の見込みで、完成後直ちにコンピューターを用いて補正作業が始められる予定である。」

（永嶋大典著『英米の辞書案内』研究社、1985、PP100-101）

(8) “Abbreviations MED Middle English Dictionary”

（J.A. Burrow and Thorlac Turville-Peter, “A Book of Middle English, Blackwell Publishers, 1992”）

(9) 「凡例

2.

2. 1. 語義は、その語の初出義及び主要な意味を品詞ごとに、年代順に示した。その際、語義ごとに、それが英語文献上最初に用いられた、いわゆる初出年代を Oxford English Dictionary (OED: 第2版), Middle English dictionary (MED) および前者を修正・補足する Bailey (1978), Rynell (1987), Barnhart (1988), Schäfer (1989) や新語辞典その他によって«»に入れて示した。

（寺澤芳雄編集主幹, 『英語語源辞典』研究社, 1997, xi)」

(10) 「参考書目

III Dictionaries

Kurath, H. et al.eds. (1954-2001) *Middle English Dictionary*. Ann Arbor:

University of Michigan P. [MED]」

(荊部恒徳・笹川 壽昭・小山良一・田中芳晴共著『徹底解明欽定英訳 聖書初版マタイ福音書－解説・原文・註解・文法－』研究社, 2002, P253)

ここで気がつくのは、(1)の『英語語源小辞典』の中で既に「MED」と略されていることと、(2)の永嶋氏の記述にあるように MED というのが略称として認められていると言うこと、つまり1970年代に既に MED が Middle English Dictionary の略語として認知されていると言うことがわかる。それだけではない。何よりもインターネットで Michigan University Press を検索し、Middle English Dictionary を調査すると Michigan University Press が以下のように Middle English Dictionary の略語として MED が使用していることが判明した。¹

MIDDLE ENGLISH DICTIONARY (MED) Research Unit

Executive Director: Robert Lewis

Title: Professor, English Language & Lit Dept

Term: Open (MED Ends 7/31/01)

Appointment: U/YR - English

2 MO Summer Salary - MED

...ibid...

CHARGE TO THE MIDDLE ENGLISH DICTIONARY COUNCIL

The Middle English Dictionary Council shall serve as the executive body for the Middle English Dictionary. Its status and authority in relation to the staff, the Advisory Committee, and the Editor and Executive Director of the MED shall be analogous to the status and authority of the Executive Committee of the College of Literature, Science, and the Arts in relation to the staff, the faculty governing body, and the chairperson of a department in that College.

The MED Council shall have final responsibility for and supervisory authority over the administration, funding, and orderly progress of the Dictionary. It shall conduct oversight of (1) overall planning and management of the project; (2) rate of progress toward completion; and (3) hiring, promotions and terminations of MED staff. It is not intended that the MED Council intrude itself upon the day-to-day operations of the Dictionary, which will remain the responsibility of the Editor and Executive Director of the MED. Subject to the supervisory authority of the MED Council, the Editor and Executive Director of the MED shall have the following responsibilities: (1) planning based on governing editorial policy and availability of staff and resources; (2) staff review, for purposes of promotion and salary adjustments; (3) personnel policies affecting duties and work conditions and (4) hiring individuals to the MED staff. Decisions and recommendations in such matters shall be reported to the MED Council for approval. The Editor and Executive Director shall have sole responsibility and authority for all matters relating to editorial policy and practice, for administration of established personnel policies and management of the MED's budgets. The MED Council shall have final authority for adjudicating matters in dispute, should any arise. The MED Advisory Committee shall assist the Editor and Executive Director in reaching decisions about the internal operation of the project in accordance with procedures approved by the MED Council, and in framing recommendations to be presented to that Council.

Contact Stacy @ 3-6048 with any changes to this document. revised: 11/2/00

このことから判断すると、決して Middle English Dictionary の略語が MED というのは、筆者達や樋口氏のような単なる一個人が使用する略語ではなく、Middle English Dictionary の出版元である University of Michigan Press も使用しているものであるということ、更に(6)の永嶋氏の記述からもわかるように、内容においても OED と同様に長い年月をかけて作られた権威ある辞書であるということを考えると、MED という略語も OED、COD、

PODと同様に伝統のある辞書の略語として歴史的に確立したものと充分考えられるはずである。中でも、英語辞書学の世界で著名なハートマン氏が監修した著書の中で（実際の執筆者はR.マーキン氏であるが）Middle English Dictionaryの略語がMEDと記述しているということはMEDがMiddle English Dictionaryの略語として認められていると考えられるし、国内でも研究社の新英語学辞典の参考文献欄にMiddle English Dictionaryの略語としてMEDとされているし、更に同社の英語語源辞典の凡例の説明文で使用されていることから、MEDが既にMiddle English Dictionaryの略語として、認知されているものと十分考えられる。これに対しMacmillan側は、八木克正氏も述べているように、「巻頭の解説でも終始Macmillan English Dictionaryのように、書名をフルに使って」おり、決してMEDという略語は一切使用おらず、歴史的に見れば、まだまだ個人的レベルの略語であると考えられる。

5 Middle English Dictionary が忘れられた理由

とは言うものの、最近の英語辞書学の流れの中でMacmillan English DictionaryのことをMEDと略す傾向が増えつつあるのは事実である。では、なぜそういう流れになってしまったのだろうか。その理由は英語辞書学がかつてはEnglish Philologyの一分野であったが、現在はEnglish Linguisticsの一分野になってきたためだと考えられる。以前の英語辞書（特に英和辞典）の執筆者は現代英語の語法についてはもちろんだが、OE, ME, AV, Shakespeare, Gk, LatといったPhilologicalな面においても詳しかったし、辞書にもそのような匂いが漂っていた。たとえば、日本の英語辞書史で著名な斉藤秀三郎、市川三喜、中島文雄、大塚孝信、河村重治郎、斉藤静、田桐大澄といった諸氏はPhilologyの専門家、あるいは学問的背景にPhilologyの知識をもっていた。また、英語辞書に関する著作のある上記の著者はPhilologyの専門家である。更に付け加えるなら、1961年に研究社から出

版された「テーマと研究シリーズ」の第5巻は「英語学」（執筆者は宮部菊男氏）となっているが、英語名が現在の“English Linguistics”ではなく“English Philology”となっていることからわかるはずである。しかし、現在の辞書（特に学習英和）は、一部の専門家を除けば、執筆する側の専門分野も細分化してきたためか Philological な知識を持っている人々が少なくなってきたこと、さらに最近の各辞書がコーパス面を強調していることからわかるように、英語学の流れがより実用的で、実際的な面を今までにないくらい強く求められてきていることもあり、以前のような Philological な面が大幅に削減されたことも一因であるように感じられる。また、大学でも一部のゼミを除いて、英語（発達）史の授業ではほとんど OE や ME の原文を読ませないという話も聞く。そのため一部の専門（特に大学院）で研究するものは別として、MED の存在を知っているものが少なくなってきたこともあり、Macmillan English Dictionary の略語として MED と言うのを聞いても何の不思議もなく受け入れられる人の数の方が増えてきているのではないだろうか。

6 おわりに

しかし、英語辞書史的な立場から言わせてもらうならば、1953年に Middle English Dictionary の第1冊の刊行を皮切りに、2001年に最終冊数の第118冊目を48年の長期にわたって刊行し、内外においてその存在を認められ、Middle English Dictionary の略語として MED が定着してきたことを考えると、いくら優れた辞書とはいえ、2002年にでたばかりの Macmillan English Dictionary の略語を MED とするのは、歴史的な背景から見ても不適切であり、できれば MACED、MacED、MCED、McED 等の略語の方が適切のように思われる。もっとも、Middle English Dictionary と Macmillan English Dictionary を同時に使うことは英語辞書学研究者や ME 研究者でなければほとんどないので、「あまりたいしたことはない」「どうでもいい」と言うの

が本音なのかもしれない。だが、日本ではあまりなじみはないかもしれないが海外には略語辞典があるということから判断すると、略語も歴史的・文化的な観点から見ることの出来る一種の文化であると考えられる。だとすれば、MED という略語は Middle English Dictionary で使うべきで、やはり Macmillan English Dictionary の略語は別につくるべきである。

注

- 1 <http://www.press.umich.edu/series.do?id=UM28>
<http://www.research.umich.edu/contacts/ovpr/MED.pdf>